

誰が来ても玄関を開けてはいけない。オオカミなんか恐くないけど、泥棒やもつと恐い人が来るかもしれないのだ。子供一人だと知られるだけでも危ないのだから言われている。

ピンポーン♪

二度目の音に、夕夜は好奇心を抑えられなくなった。台所に玄関のインターフォンに繋がったモニターがある。椅子を持ってきて上つて画面を見たけれど、誰もいない玄関しか映っていなかった。

「あれ、カメラ壊れちゃったのかな」

そつと忍び足で夕夜は玄関へ向かった。誰が来たのを見るくらいなら構わないだろう。気づかれないようにこつそりと様子を窺って、すぐにひっこめば良いはずだ。ナオヤが出かけた時にちゃんと鍵をかけたからもし変な人がいても平気だし、それにナオヤが帰ってきて鍵を忘れて困っているかもしれない。

好奇心に言い訳をしながら玄関を見ると、三和土に知らない男が立っていた。

「やあ」

「わあああつー！」

どうしてだろう。ちゃんと鍵は閉めたはずだ。夕夜は男の後ろのドアを見たが、きちんと閉まっている。(ドアも開けずに入ってくるのは泥棒かオバケしかない

ない！)

男はにやにやと笑いながら夕夜を見ている。とても恐いけれど、逃げだしたら追いかけてくるかもしれない。

どう見ても大人だが、父親よりはずいぶんと若いようだった。保育園の先生と同じくらいかなと思った。スーツを着ていたが、それは夕夜や友達のパパが着ているような暗い色合いのものではなかった。シャツは黒だったが、更に派手な色のネクタイには目立つ金色のピンがついていた。

「おや、ナオヤ君はいないのかな？」

男が突然従兄の名前を出した事で、夕夜は少し混乱から立ち直った。

「だ、だれですか？ ナオ兄ちゃんを知ってるの？」

「ボク？ そうだよナオヤ君の友達だ。彼はいないの？」

「学校に行ってます。でもすぐに戻ってくるって」

ナオヤの友人だと名乗られてほっとした。だから夕夜は口を滑らせてしまった。

「ねえ、それじゃあ今この家には君一人しかないの？」

「うん、そうだよ……っ！」

「どうしたんだい？」

(誰もいないって言っちゃいけないんだ。どうしよう……)